

特別支援学級在籍児童の交流及び共同学習を通じた 変化プロセスの検討[†]

瀧音 夏実*・司城紀代美*
宇都宮大学大学院教育学研究科*

概要 近年の特別支援教育では、子どもたち同士での学び合いの機会を作ろうと、多くの学校で交流及び共同学習が活発に行われている。本研究では、筆者自身が児童とかわりあいながら交流学級と特別支援学級を行き来する児童の言動や人間関係形成の変化プロセスについて検討を行った。その結果、当初は交流学級の児童とは、自分からかわりを持つことができず、何をしたらよいか分からず授業に対して全体的に受け身の行動が多かった対象児に徐々に変化が見られた。自分の役割を把握し、全うすることができる場面や、交流学級の雰囲気になじめることができ、体育の時には試合を心から楽しむ場面も見られた。また、支援学級で関係が上手くいかず、対立することが多かったクラスメートとの関係が良好になり、支援学級での心理的安定が交流学級の様子に影響を及ぼすことが推察された。

キーワード：交流及び共同学習 参与観察 エピソードの分析

I 問題と目的

我が国における交流教育は、平成16年の障害者基本法の一部改正に伴い「交流及び共同学習」という名称に変更された。交流および共同学習の目的は、「相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面がある」（文部科学省、2009）とされ、このように両方の側面が一体としてあることが重視されている。

近年の特別支援教育では、子どもたち同士での学び合いの機会を作ろうと、多くの学校で交流及び共同学習が活発に行われている。交流の形は、例えば、小学校と特別支援学校という学校間、通常の学級（以下、通常学級）と特別支援学級という学級間が挙げられる。

細谷（2011）は特別支援学級担任に交流及び共同

学習の目的について調査を行った。その結果、「集団生活における社会性（78.7%）」「人間関係の形成（59.6%）」「特別支援学級の児童生徒の理解（36.2%）」が挙げられた。また、遠藤・佐藤（2012）は通常学級担任と特別支援学級担任に交流の目的について調査を行い、その結果、「思いやりの心を育む」「人間関係の形成」「特別支援学級児童の理解」が挙げられたが、特別支援学級担任の73%が「人間関係の形成」を目的として挙げている一方で、目的が達成されたと考える担任はわずか29%であった。これらの結果から、交流及び共同学習を通して、「人間関係の形成」を育んでいきたいという担任の思いがありながら、結果的には目的が十分に果たせていないという現状がある。

筆者は、2014年6月から宇都宮市内の小学校の特別支援学級でボランティアとして学習支援を行っている。この小学校でも交流及び共同学習は活発に行われており、音楽や体育の時間になると特別支援学級在籍児童は通常学級で授業を受けている。筆者は児童の学習支援の際に時々、通常学級の授業にも入ることがある。二つの学級を行き来するなかで、授業を受ける児童の言動や表情に違いがあることに気が付いた。特別支援学級で授業を受けている時は、自分の考えを自分の言葉で自由に発表したり、特別

[†] Natsumi TAKIOTO*, Kiyomi SHIJO*: The Process of Change of the Child in Special Needs Class through Exchange and Joint Learning

Keywords : exchange and joint learning, participant observation, analysis of episode

* Graduate School of Education, Utsunomiya University

（連絡先：shijol@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

支援学級に在籍する児童同士で積極的にコミュニケーションをとるなど生き生きとした表情を見せている児童が、通常学級で授業を受けている時は教師の顔を見ていなかったり、他児とコミュニケーションをとる姿があまり見られない。このように、通常学級と特別支援学級という学級の違いにより、児童の言動や表情に大きな違いがあることが観察された。

遠藤・佐藤（2012）は、交流及び共同学習の今後の検討課題として、特別支援学級児童の立場での交流の目的と手立ての再確認、通常学級担任主体の授業のユニバーサルデザイン化、通常学級担任と特別支援学級担任の打ち合わせ・連携の工夫などを挙げている。先行研究では、担任の視点から調査した研究は多々あるが、特別支援学級在籍児童に焦点を当て、二つの学級での児童の言動や人間関係形成の変化について詳細に研究しているものはまだ少ない。

そこで本研究では、通常学級と特別支援学級における対象児と他児のかかわりの違いについて検討する。筆者自身が児童とかかわりあいながら通常学級と特別支援学級を行き来する児童の言動や人間関係がどのように変化するかを分析していく。

II 研究方法

1 対象児

対象児童は、自閉症・情緒特別支援学級に在籍する小学4年生の女児ノゾミ（仮名）である。ノゾミはADHDの診断を受けている。3年生までは、通常学級に在籍していた。交流開始は、4年生4月からである。ノゾミの主な交流は、体育、音楽、英語、給食、クラブ活動、委員会活動、掃除、登下校、学校行事である。

1、2年生の時から、「ノゾミちゃん、ノゾミちゃん」と周りの友達から慕われている。3年生までは、漢字を書くことはできなかったが、ひらがなは書くことができていた。算数では、時刻を読み取るのに時間がかかる。また、九九の七の段が少し曖昧な部分がある。4年生の時点で学習面では、1～2年程度の遅れがみられる。一方で、身体能力が高く、鉄棒や組み体操が得意である。学級内では、いつも明るく元気で友達と積極的にかかわる姿が見られる。竹馬や一輪車などにも挑戦し、できるようになるまで練習するほどの頑張り屋である。しかし、些細なことがきっかけで急に泣くことがあり、泣くとその場から動かなくなってしまうことがある。

2 観察期間

2014年6月～2015年3月に週1回程度、登校から下校までの間（8:35～15:00）に参加観察を行った。

3 手続き

筆者は、特別支援学級のボランティアとして学習支援を行いながら、児童の観察を行った。

特別支援学級及び通常学級の出来事やノゾミの発言等、教師の働きかけ及び他児とのかかわりを観察しノートに記録した。観察記録で気になったことをエピソードとして書き起こした。

III 結果と考察

1 通常学級の状況

ノゾミの交流学級である通常学級の在籍児童は、35名であった。男子、女子ともに元気が良く、活発な児童が多い。係分担が明確で、先生からの指示がなくても、自ら考え、自主的に行動する児童が多く見られる。また、音楽などの交流の時間になると、交流学級の児童が特別支援学級までノゾミを迎えに来てくれる。ノゾミが通常学級に交流に行ったときには、「ノゾミちゃん、ノゾミちゃん」と話しかけてくれる児童もいる。ノゾミが困っているときには、声をかけ、助けてくれることもある。

2 特別支援学級の状況

特別支援学級（以下、支援学級）の在籍児童は、4月～7月は男子3名、女子4名の計7名であった。穏やかで優しい児童たちで、学年に関係なく仲が良い学級であった。夏休み明けの9月になると、通常学級から支援学級に入ってきた女子1名がいたため、計8名になった。

3 エピソードの分析

支援学級と通常学級での参与観察から23のエピソードを抽出することができた。エピソードの内訳は、支援学級13、通常学級10であった。通常学級では時間割の都合上、主に体育を観察する時間が多くなった。また、子どもたちは授業だけでなく、給食や休み時間にも多種多様に交流するため、給食や休み時間も分析の対象とした。エピソード内でノゾミが表出する態度・行動の特徴に着目して分類を行った。分類の項目は以下のとおりである。〈拒絶〉：

他者の行動に対して納得がいかず、泣いて動かなくなってしまったとき。〈拒否〉：他者からの要望や要求に対して、受け入れることができないという意思を表出したとき。〈主張〉：自分の考えをはっきりと主張したとき。〈受容〉：他者からの要望や要求を受け入れたとき。以上のどの項目にも属さないものを〈その他〉と示している。

通常学級でのエピソードはTable1、支援学級でのエピソードはTable2に示した。

(1) 全体的な傾向

〈拒絶〉が3、〈拒否〉が3、〈主張〉が6、〈受容〉が10、〈その他〉が1という結果になった。時系列で全体を見てみると、6～10月にかけては〈拒絶〉と〈受容〉を交互に繰り返している。9月から新しいクラスのメンバーが増えたこともあり、ノゾミの気持ちが少し不安定な時期であったのではないかと考えられる。11月は〈主張〉が多い。これは、主に支援学級での出来事である。ノゾミが相手に対して「～したい」「～してほしい」という思いを伝えることができた時期であった。その後、12～2月上旬までは〈受容〉や〈拒絶〉を繰り返す時期であった。そして、2月中旬～3月にかけては比較的〈受容〉が多くなった。この頃になると、通常学級

での交流にも慣れ、ノゾミが主体的に活動する場面が多く観察されるようになった。また、支援学級での人間関係も安定してきた時期であった。そのため、他者の意見を受け入れることや、学級の雰囲気を受け入れることができたのではないかと考える。

(2) 通常学級

通常学級では、〈拒否〉が3、〈主張〉が1、〈受容〉が5、〈その他〉が1であった。通常学級では、〈拒絶〉の行動は観察されなかった。逆に、〈拒否〉は通常学級でのみ観察された。

通常学級在籍児童との間でのエピソードを以下に示す。

〈エピソード①〉「一輪車」

2014.6.30 中庭 休み時間

ノゾミと筆者は、一緒に中庭に遊びに行った。最初はノゾミが育てているミニトマトを観察したり、カエルやバッタを追いかけて遊んでいた。

少しすると、ノゾミは「一輪車で遊びたい」と筆者に話しかけてきた。しかし、一輪車は全て他の児童に使われていた。筆者は「お友達が使っちゃっているね」と言った。すると、ノゾミは「一輪車で遊

Table1 通常学級でのエピソード

番号	年	月	日	エピソード名	学級	場所	時間	教科	分類
1	2014	6	30	一輪車	通常	中庭	休み時間		拒否→受容
5	2014	10	28	ノゾミルール	通常	校庭	4時間目	体育	受容
9	2014	11	18	キックベース準備	通常	校庭	4時間目	体育	拒否→受容
10	2014	11	18	キックの順番決め	通常	校庭	4時間目	体育	主張
13	2015	1	20	砂いじり	通常	校庭	4時間目	体育	その他
16	2015	2	10	縄跳び	通常	校庭	4時間目	体育	拒否
17	2015	2	17	ナイス!	通常	校庭	4時間目	体育	受容
21	2015	3	10	おかず当番	通常	通常学級	給食		受容
22	2015	3	17	やった! やった!	通常	校庭	4時間目	体育	受容
23	2015	3	17	どこ見ればいいのか?	通常	校庭	4時間目	体育	受容

Table2 支援学級でのエピソード

番号	年	月	日	エピソード名	学級	場所	時間	教科	分類
2	2014	7	7	話を聞く時間	支援	支援学級	3時間目	国語	拒絶
3	2014	10	7	先生、来て	支援	中庭	休み時間		受容
4	2014	10	21	なぐり書き	支援	支援学級	3時間目	算数	拒絶
6	2014	11	11	足首つかむんだよ	支援	支援学級	1時間目	日常生活	主張
7	2014	11	11	都道府県カルタ①	支援	支援学級	5時間目	社会	主張
8	2014	11	11	都道府県カルタ②	支援	支援学級	5時間目	社会	主張
11	2014	11	25	約束	支援	支援学級	休み時間		主張
12	2014	12	2	漢字カード	支援	支援学級	3時間目	国語	受容
14	2015	2	3	嘘つかれた	支援	支援学級	給食前		拒絶
15	2015	2	3	靴がない	支援	昇降口	休み時間		主張
18	2015	2	24	私たち仲良くなったんだよ!	支援	支援学級	休み時間		受容
19	2015	2	24	何して遊ぶ?	支援	支援学級	休み時間		受容
20	2015	2	24	昼休みは鬼ごっこでもいい?	支援	支援学級	休み時間		受容

びたい！」と少し強い口調で言った。筆者は「じゃあ、お友達に借りてきたら？」と言うと、ノゾミは黙ってしまった。筆者は「友だちに借りなきゃ遊べないよ？」と言うと、ノゾミは「ヤダ！」と言って少し駄々をこねた。筆者は「『一輪車貸して』と言えば貸してくれるよ」と言ったが、ノゾミは黙ったままだった。

すると、その様子を近くで見ている児童Aが、「私が貸してと言っただけよ！」とノゾミに声をかけてくれた。そして、児童Aは、一輪車に乗っている児童Bに「Bちゃん、次この一輪車、ノゾミちゃんに貸してあげて」と言った。児童Bは嫌な顔一つせず、快く一輪車を貸してくれた。ノゾミは「ありがとう」と少し小さい声で言った。

[考察]

ノゾミは、特別支援学級に在籍している児童とは積極的にコミュニケーションをとるが、通常学級に在籍している児童とはあまり積極的にコミュニケーションをとろうとしない。〈エピソード①〉のように、筆者が他児に話しかけるように促しても、「ヤダ！」と言って、自分から話しかけようとはしなかった。ノゾミは、交流学級での授業でも、あまり他者に話しかけることをしない。他者から話しかけられれば、受け答えはできるが、一言二言で返す程度である。授業態度も全体的に受け身で、自分から話し始めることはほとんどない。このように、ノゾミ自身は通常学級の児童との間に何らかの壁を感じているようである。

しかし、近くでノゾミの様子を見ていた児童Aはノゾミのことを知っていたらしく、自然な流れでノゾミに話しかけてくれた。ノゾミ自身は受け身で話を聞いていたが、積極的に話しかけてくれた児童Aのおかげで、ノゾミは一輪車を借りることができた。また、一度は〈拒否〉の行動が見られたが、児童Bが快く一輪車を貸してくれたことにより、〈拒否〉の行動がなくなり、「ありがとう」と感謝の言葉を述べることもできた。

始めは〈拒否〉の行動を示していたが、最終的には児童Aの言葉がけを〈受容〉したと考えられる。

交流学級でも、周りの児童がノゾミに声をかけて助けてくれる場面が何度か見られた。例えば、体育の時間に、ノゾミがどこに行けばよいか分からず、

ウロウロしていた時に、周りの子が「ノゾミちゃんはこちらだよ」と教えてくれたこともあった。

ノゾミは、〈拒否〉の行動を示すことはあるが、交流学級の児童から声をかけられると、その相手の話を受け入れるということがある。そこには、ノゾミ自身から話しかけることは難しいが、相手から話しかけられることは嫌ではないという関係がある。

また、通常学級において、〈主張〉が一度だけ登場している。この時のノゾミは、相手に対して自分の考えをはっきりと主張していた。

〈エピソード⑩〉「キックの順番決め」

2014.11.18 通常学級 校庭 4時間目 体育

キックベースの準備を終えた後、先攻後攻に分かれた。ノゾミのチームは先攻になった。ノゾミは地面にしゃがみ、手で砂いじりをしていた。

先攻になったため、打者の順番を決めることになった。児童Cが「ノゾミちゃん、何番がいい？」とノゾミに声をかけた。ノゾミは砂いじりをしながら「3番」と言った。児童Dは「ノゾミちゃん、最後がいいって言ってなかった？」と言ったが、児童Cは「ノゾミちゃんは3番がいいって言ってるよ」と言った。その会話を聞いていたノゾミは「ノゾミちゃん、3番がいい！」と大きな声で言った。それを聞いた児童Cは「じゃあ、ノゾミちゃんは3番ね。他の人は？」と他の自チームの人に声をかけ始めた。ノゾミは砂いじりを続けていた。

[考察]

ノゾミは、自分は3番打者になりたいということ強く主張している。ノゾミにとって3番という打順にこだわりがあったのかどうかは分からない。しかし、通常学級において、ノゾミが他者に対して自分の考えを強く主張する場面は初めてであった。他者に聞かれたことに対して答えることもでき、自分の主張を相手に伝えることもできている。このことから、交流学級の児童とも少しずつやり取りをできるようになってきたのではないかと考えられる。

1月になり、体育でラインサッカーを行うことになった。始めはラインサッカーのルールが十分に理解できず、ノゾミはコートのをウロウロする、砂いじりをするなど、授業に対してあまり関心がないようであった。

しかし、2月中旬以降は、ノゾミの様子に変化が見られるようになってきた。

<エピソード②③>「どこ見ればいいの？」

2015.3.17 通常学級 校庭 4時間目 体育

ラインサッカーの三試合目。ノゾミは審判を担当することになった。ノゾミと同じチームの児童Aがノゾミに「ノゾミちゃん、審判厳しくね」と言った。すると、ノゾミは「うん」と答え、すぐに「どこ見ればいいの？」と児童Aに聞いた。児童Aは「この線から出たらだよ」とサイドラインを指差しながら話し、ノゾミは「うん」と答えた。

その後、ノゾミは立ったまま足で砂いじりをする様子も見られたが、ノゾミの方にボールが転がってくると急いでボールを追いかけ、ボールを取りに行き、審判の役割を全うしていた。

[考察]

ノゾミは児童Aからの「審判厳しくね」という発言に対し、「うん」と答えただけで「受容」ができたと考えられる。さらにノゾミは「どこ見ればいいの？」と疑問に思っていたことを児童Aに聞いている。これまで約1ヵ月間、ラインサッカーの単元を継続的に授業していて、審判の役割を何度も行ってきたが、「どこ見ればいいの？」と他者に聞いたのは初めての出来事だった。何度も行ってきた審判の役割を約1ヵ月経ってから他者にルールを確認するということは、ノゾミはこれまでルールが曖昧なまま審判を行ってきたのではないかということが推察される。しかし、ノゾミの中で曖昧だったルールを児童Aが丁寧にサイドラインを指差しながら視覚的に分かりやすく教えてくれたため、ノゾミは納得して他者の発言を「受容」できたと考えられる。

これまで通常学級では、ノゾミは他者からの発言に対して「主張」や「拒否」の態度を示すことは見られたが、自ら他者にかかわろうとすることは少なかった。しかし、エピソード②③では、短い会話ではあったが、相互に言葉のやりとりを行っており、自然な会話が成立している。継続的に交流を行ってきたことや授業に慣れてきたことで、他者とのかわりに対する抵抗感が和らいできたのかもしれない。また、自分の疑問を素直に他者に伝えられており、疑問を解決しようとしている様子がみられる。自分から疑問を解決しようとしている行動は、ノゾ

ミが自分に与えられた役割をしっかりと全うし、主体的に授業に取り組もうとしている意思の表れであると考えられる。これまで受け身の状態で授業に臨んでいるように見えていたが、徐々に他者の意見を受け入れる姿や、授業に主体的に取り組もうとする様子もみられるようになった。

(3) 支援学級

支援学級では、「拒絶」が3、「主張」が5、「受容」が5という結果になった。「拒否」は表出されなかった。また、「拒絶」の行動は支援学級のみで観察された。「拒絶」の例を、以下のエピソードで示す。

<エピソード②>「話を聞く時間」

2014.7.7 支援学級 3時間目 国語

支援学級担任のM先生の話聞く時間があった。M先生は「お話を聞く時間なので、自分の椅子を黒板の前に持ってきてください」と子どもたちに指示した。ノゾミも言われた通り、椅子を持って黒板の前に来た。しかし、ノゾミが椅子を置こうとした場所に児童Yが割り込み、先に椅子を置いてしまった。自分の場所を取られてしまったノゾミは「ノゾミがそこに座ろうと思ったのに…」と言って、少し怒った表情をして拗ねてしまった。怒ったノゾミはその場に椅子を置き、教室の後ろの隅にある簡易鉄棒の後ろに隠れ、しゃがみこんでしまった。

筆者は「ノゾミさん、話を聞く時間だから前に座ろう」と声をかけたが、ノゾミは黙ったまま反応しなかった。

その時、M先生は筆者に「そのまましておいてください」と言った。筆者は、ノゾミから少し距離を取った。M先生は、ノゾミの姿が視界に入るように黒板の前に座り、何事もなかったかのように授業を続けた。

ノゾミは自分の顔を腕と膝で覆い隠し、しばらくしゃがみこんでいた。しばらくすると、ノゾミは少しずつ顔をあげるようになった。少し涙を流しているようだった。筆者はノゾミに近づき、「気持ちが落ち着いたら、戻っておいで」と声をかけた。すると、ノゾミは袖で涙を拭いながら、スッと立ち上がり、黒板の所に歩き出し、自分の椅子を持って、みんなと椅子を並べて着席した。

M先生は「ノゾミさん、よく戻ってきたね。ノゾ

ミさんが戻ってきたから、もう一度話すね」と言い、ノゾミが自分で戻って来たことを褒め、そのまま授業を再開した。

[考察]

ノゾミは、このような些細なことがきっかけで急に泣き出すことがある。誰かに何かをされ、ノゾミ自身はその行動に納得できなかつたとき、自ら教室の隅にしゃがみ込み、泣いたり、ブツブツと何かを呟きながら怒るという行動が何度か観察された。しかし、ノゾミは時間が経つにつれて、落ち着きを取り戻し、冷静になることができる。そして、自分の気持ちが整理できると、自分のやるべきことへと戻ってくるることができる。ノゾミが泣くときは、毎回このような行動パターンになっている。最初は衝動的に泣いてしまうが、しゃがみ込んで泣いているうちに冷静さを取り戻し、自分の気持ちを整理する。そして、自分の気持ちが落ち着いたところで、皆の所へ戻ってくる。

また、ノゾミが泣く行動が支援学級でしか観察されなかつたことには、理由があると考えられる。ノゾミは、支援学級にいるときは、自ら他者に話しかけ、積極的に他者とかわろうとする様子が見られる。この行動から、支援学級はノゾミにとって安心できる環境であり、自分の感情や思いを表現できる場所なのではないかと考えられる。泣くという感情だけでなく、自分の意見を主張することも多く観察されることから、自分の思いを自由に伝えられる環境が支援学級にはあると考えられる。

2月には<受容>が連続して見られた。これまで自分の考えを主張するばかりだったノゾミが、他者の話を受け入れる行動が見られるようになった。それには、9月に通常学級から支援学級に入ってきた女兒がかかわっていると考えられる。

新しく入ってきた児童は、3年生のユリ（仮名）という女子であった。

ユリが移動してきた当初は、ノゾミとユリはお互いの意見がぶつかり合い、対立することが多かった。支援学級の担任は「ノゾミとユリが一緒に遊ぶと、お互いにぶつかってしまう。だから、物理的に離して遊ばせるようにしている」と話していた。しかし、一方で、「ノゾミとユリは時々仲良くなり、気が合うときは合う」ということも話していた。

ノゾミとユリの対立する場面は日常的に観察された。その様子を以下のエピソードに示す。

<エピソード⑥>「足首つかむんだよ」

2014.11.11 支援学級 1時間目 日常生活

1時間目は日常生活の授業として朝の会を行っている。朝の会では、必ずラジオ体操を行う。ラジオ体操をする配置はとくに決まっていなが、たまたま筆者の右隣にユリ、左隣にノゾミが立っていた。ノゾミは口を閉じ、無駄話をせず、真剣にラジオ体操をしている。一方、ユリは少しふざけながらラジオ体操を行っていた。

ラジオ体操の後にはストレッチ体操もする。ストレッチ体操のときに、担任の先生が「足首をつかんで、ゆっくりお尻をあげます」と全員に指示を出した。児童らは全員、先生と同じように足首をつかみ、お尻を上げた状態になる。しかし、ユリだけは膝に手を置いている。筆者はユリの方を向きながら、「足首をつかむんだよ」と声をかけた。しかし、ユリは「いいんだよ」といって足首をつかもうとしない。

そのとき、ノゾミがユリに向かって「ユリさん！足首をつかむんだよ！」と少し強い口調で注意した。しかし、ユリはノゾミの話聞いていたようだったが、ノゾミの発言を無視して、そのままストレッチ体操を続けた。ノゾミは、少し苛立った表情をしていた。

[考察]

ノゾミは、先生から言われたことを忠実にやる真面目な児童である。ノゾミが真剣にストレッチ体操に励む一方で、ユリは少しふざけ気味でストレッチをしていた。ノゾミはユリに対して真面目にストレッチをして欲しいと思い、注意したのであるが、ユリはノゾミの注意を聞き入れなかつた。話を聞き入れてもらえなかつたノゾミは、ユリの態度に納得することができなかつた。そのため、苛立った表情を見せたのではないかと考える。

このように、ノゾミとユリが対立することが日常的に観察された。互いの意見がぶつかり合うこともあるが、ノゾミがユリの行動を注意するという場面が比較的多く観察された。

しかし、ある日突然、ノゾミとユリが、朝から仲良さそうに話していた。筆者は、なぜ急に二人が仲

良くなったのかを聞いてみた。

<エピソード⑱>「仲良くなったんだよ」

2015.2.24 支援学級 休み時間

筆者は「ねえねえ。君たち何でそんなに仲良くなったの？」とノゾミとユリに聞いた。すると、ノゾミが「昨日から仲良くなったの」と答えた。筆者は「昨日何かあったの？」と聞いた。すると、ノゾミが「昨日ね、私が隅っこで泣いてたらね、ユリさんが来てね、ペロペロって変な顔してきたんだよ」と言った。そして、すかさずユリが「そう、ペロペロペロペロって」と笑いながらペロペロと面白い顔をして見せた。ノゾミは「そしたらね、ノゾミちゃんがクスって笑ってね」と笑いながら言うと、ユリが「そこから仲良くなったの」と言った。ノゾミとユリはお互いの顔を見ながら、ニコニコと楽しそうに笑っていた。

[考察]

ノゾミとユリの話から、彼女たちの中で何かが変わったことが伺えた。話を聞く限りでは、ノゾミが教室の隅で泣いていたところに、ユリが現れ、ペロペロと面白い顔をした。そのことをきっかけに、ノゾミはクスッと笑い、仲良くなったということだった。

これまで、ノゾミはユリに対して、苛立つ場面が多々あった。ノゾミが注意していることに対して、ユリは聞き入れることが少なかつたため、ノゾミはユリに対してあまり良い印象を持っていなかったのではないと考える。

しかし、今回は、ユリからノゾミに接近し、行動を起こしている。ユリが面白い顔をして見せたのは、ノゾミを元気づけようとした行動にもみえる。そして、結果的にノゾミはユリのことを受け入れ、互いの間にある心の距離が接近し、仲良くなったのではないかと考えられる。

支援学級では、<拒絶>や<主張>が多く観察されていたが、このエピソード以後、ノゾミは他者からの意見や提案を受け入れる行動が多く観察されるようになった。ノゾミにとって支援学級は落ち着ける場所であり、自分の考えや思いを自由に発言できる環境であった。その反面、相手の意見や考えを受け入れるということがあまりできていなかった。しかし、他者の意見や考えを受け入れられる場面も徐々に増えていった。

IV 総合考察

通常学級でノゾミの行動が変化する前の特徴として、次の三点が考えられる。①交流学級の児童とは、自分からかかわりを持つとしない。②授業に対して全体的に受け身の行動が多く、自ら進んで行動するということが少ない。③何をしたらよいか分からずウロウロする。

しかし、このような特徴がありながらも、ノゾミが大きな混乱もなく、交流学級で過ごすことができたのは、二つの要因があるのではないかと考えられる。

まず一つ目に、周りの他児の行動をよく見て行動しているということである。集団として行動するとき、周りの子と同じように行動すればよいということもノゾミは自然と認識しているようだ。自分から動くとする意識はまだ低いが、皆が行った方向に行けば逸れることはない。そのため、他児の後について行くように追いかけていく。皆と同じ行動を取ろうという集団意識があるため、交流学級でも適応できたのだと考えられる。

二つ目に、他児の助けがあったことである。周りの子どもたちが自然にノゾミに話しかけていたことや、困っているときに助けていたことが、交流学級で過ごせた要因の一つであると考えられる。ノゾミは、全体的に他者や授業に対して受け身であったが、周りからの助けもあり、徐々に通常学級の環境にも慣れてきたのではないかと考えられる。

ノゾミの三つの特徴が変化してきたのは、2月頃のことであった。この頃のノゾミは、心理的に非常に安定していた時期であった。その理由として、交流学級の環境に慣れてきたということと、支援学級での友人関係が安定してきたことが挙げられる。

2月になると、交流に行くことに抵抗がなくなり、交流に行くことが当たり前になっていた。授業の流れを把握することができるようになり、ウロウロすることもほとんどなくなった。以前は、自ら行動することは少なく、受け身の態度が多く見られていたが、少しずつノゾミが主体的に行動する様子が見られるようになった。自分の役割を把握し、全うすることができていた。また、交流学級の雰囲気にも馴染むことができ、体育の時には試合を心から楽しむ場面も見られた。

また、2月頃には、支援学級でも変化があった。2月以前までユリとの関係が上手くいかず、対立することが多かった。しかし、エピソード⑱以降、お互

いの意見を聞き入れ、仲良さそうに話す場面が増えた。これまで対立していた関係が良好になったことで、情緒が安定したのではないかと考えられる。支援学級での心理的安定が交流学級でも影響を及ぼしたのではないだろうか。

今後は、ノゾミの変化をより詳細に分析した上で、異なるタイプの児童の場合の観察を行い、交流及び共同学習を通じて生じる児童の変化をさらに検討していきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省(2009) 交流及び共同学習ガイド
- 2) 細谷一博(2011) 小学校及び中学校特別支援学級における交流及び共同学習の現状と課題：函館市内の特別支援学級担任への調査を通して. 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 62(1): 107-115.
- 3) 遠藤恵美子・佐藤慎二(2012) 小学校における交流及び共同学習の現状と課題—A市の通常学級担任と特別支援学級担任への質問し調査を通して—. 植草学園短期大学研究紀要, 第13号, 59-64.

平成28年 3月31日 受理